みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

最初のアメリカ人 (シリーズ : 先史モンゴロイドを探る)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5802

シリーズ：先史モンゴロイドを探る

最初のアメリカ人

関　雄二

本論では，北米大陸に人類が到着した時期，およびさらに南下した集団が中米，南米にたどり着いた時期について，現段階の見解を述べるつもりである．証拠として取り上げるのは，考古学的遺跡からの発掘調査データであるが，なかでも比較の視点からも重要な役割を占める石器に注目し，起源とそこから推測される生業形態についても触れることにする．

ベーリンジア陸橋と無氷回廊の出現

アメリカ大陸の先住民がアジアよりやって来たことは多くの研究者が一致するところである．すなわち最初のアメリカ人は，シベリアよりアラスカに渡ったことになる．

氷期のベーリンジアは，氷河の発達に伴う海面低下の影響を受け，現在のような海洋環境ではなく，陸地が露呈していたと推測されている．このベーリンジア陸橋の消滅の時期は，最終氷期の末の1万4000年頃といわれているので，人類の新大陸到達にはそれ以前の年代を与えるのが妥当であろう．

しかし，ベーリンジア陸橋をたとえ早く渡ったとしても，南下を志した人々の前に一つの障害物が立ちはだかったと考えられる．氷床である．現在のカナダの東部で発達し，西に向かって進むローレンタイド氷床とロッキー山脈沿いに現れ，東進するコルディエラ氷床とが存在したと考えられる．この二つの氷床が現在のカナダ西部でぶつかり，南下の進路を塞いでいたのである（図1）．氷床の発達時期については諸説あるが，少なくとも2万年前から1万4000年前頃といわれている．

このような古地理学的条件を考慮すると，最初のアメリカ人は，少なくとも1万4000年前までにアジアからアラスカに渡り，氷床の後退を待って，眼前に出現し始めた氷床間の道，すなわち無氷回廊を南下したことが想像できる．もちろん，氷床の発達以前，すなわち2万年前以前にベーリンジアを渡り，北米大陸を南に下ることも可能であった．これらの推測に沿って，考古学的観点から，人類の残した証拠を追ってみたい．

先クローヴィス文化

誰もが認める氷期の人類（パレオ・インディアン）文化は，無氷回廊を抜けでた先の北米大陸南部で展開したクローヴィス文化である．槍先につける精巧な作りの尖頭器（図2）が，絶滅種であるマンモスなどの大型動物の骨と共伴し，氷河時代に人類がすでにこの地にいたことを物語っている．クローヴィス型尖頭器の分布範囲は広いが，マンモスとの共伴関係が証明されている遺跡になると，ミシシッピー川以西に限定される（図3）．年代は，1万1500年前から1万500年前頃と推定されている．先にあげた1万4000年前，あるいは2万年前以前という数字よりはかなり若い．したがって，問題はクローヴィス以前に人類がアメリカの地を踏んでいた証拠があるかどうかにある．いいかえれば，「先クローヴィス文化」が存在するかどうかである．

一般的に考えるならば，北米大陸南部にたどり着くまでに通過せざるをえなかったアラスカ地方にクローヴィスと関連した文化が見つかるはずで

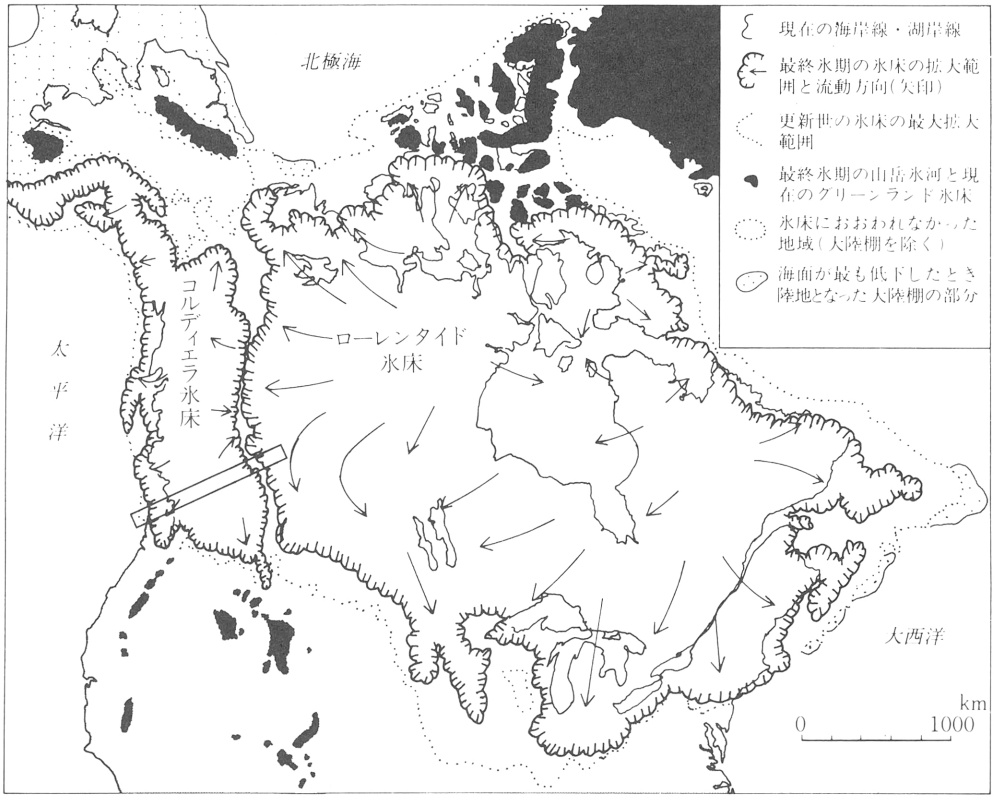

図1　1万8000年前のローレンタイド氷床とコルディエラ氷床（小野 1992 より　一部修正）

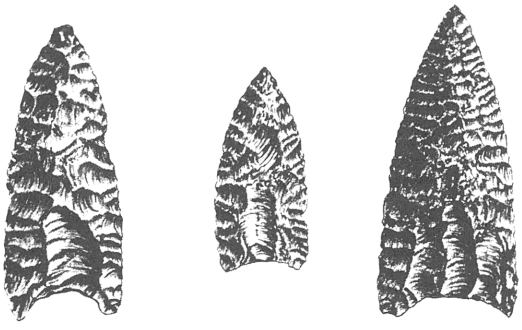

図2　クローヴィス型尖頭器，底部に樋状剝離がみられる．(Lynch 1978 より)

ある．ところが，この探索は実際にはさほど容易なことではない．

一時は最初のアメリカ人の痕跡として巷間を騒がせた遺跡に，オールドクロウがある．アラスカとの国境に近いカナダのユーコン準州に属する．出土したカリブーの骨を測った結果，2万7000年前の年代が提出され，さらに層位関係から人類の存在はそれ以前にもさかのぼるという意見が主張された．しかし肝心の層位があいまいであること，さらにタンデム加速器を用いた再度の年代測定によって若い数値が出たことから，「先クローヴィス文化」の候補から脱落した．

現在ではアラスカ地方で提出されている年代はずっと控えめになっている．たとえば最も古い年代は，ブルーフィッシュ洞窟群の獣骨を測定して得られた1万5000年前から1万2000年前頃の数値である．また1万2000年頃の年代を示す遺跡も，いくつか発見されている．こうした遺跡からは，シベリアで2万年前頃までに成立した細石刃文化を思い起こさせるような石器が出土しているとされているが，いまだに定説となってはいない．細石刃文化について述べておくならば，確かにその起源はアジアにおいて古く，また石材の節約，有効利用を実現した点で，寒冷な環境を克服するための文化装置である点は認めるにしても，北米大陸では，北部に限って，それも年代的には後氷

図3　クローヴィス型尖頭器と絶滅動物が出土する遺跡の分布
(Agenbroad 1988 を一部改変)
△：マストドン　○：マンモス　●：マンモスとクローヴィス型尖頭器
■：本分中で言及する遺跡

期に入って広がることがわかっている．細石刃文化の起源や出現年代には議論の余地が残されているとはいえ，現状ではクローヴィス文化の起源と直接関係するとは考えにくい．

さらに後に触れるが，クローヴィス型尖頭器を特徴づける底部の抉り，すなわち樋状剝離(fluting) を備えた尖頭器がアラスカ地方で現れるのは，さほど古いことではなく，北米大陸南部のクローヴィス文化の遺跡に与えられている年代とほぼ同じ頃である．このように，調査不足を考慮に入れたとしても，アラスカ地方において，「先クローヴィス文化」の明確な証拠はいまだに現れていない．もう少し南の地域に目を転じてみよう．

ペンシルヴェニア州メドウクロフト洞窟は，長年の批判に耐えて「先クローヴィス」の最有力候補の地位を確保し続けている遺跡である．1万9000年前から1万2800年前の時代を指す層からは，紛れもない尖頭器を含む石器が出土している．年代を平均すると1万6000年前となる．実験考古学，土壌，地質，地理などさまざまな分野の専門家の協力を得て，批判点の検証を積み重ねている点が心強い．現在では，この遺跡の評価をめぐる論争の焦点は，フミン酸や石炭などが絶対年代に影響を及ぼしたかどうかという年代測定試料の問題点に限定され，他の証拠はいちおう批判をクリアーしている．このほか，オレゴン州のフォート・ロック洞窟からは，黒耀石の尖頭器2点が出土し，1万3250±720年という年代がでているが，メドウクロフトのように再調査や徹底的な検証は行われていない．

中米・南米における先クローヴィス文化

先クローヴィスの探求は，中米でも行われている．しかし，メキシコのサン・イシドロの石器は，年代がわからない表面採集品であるし，トラパコーヤ（2万4000年前）出土の石器といわれている品も石器とは判別できない．ニカラグアのエル・ボスケも石器と炉跡などの解釈の点で問題がある．いずれもメドウクロフトのような精度の高い研究ではない．さらにクローヴィス文化と平行するような石器文化も，遺物は確認できても年代が出ていないなど，不明な点が多すぎる．

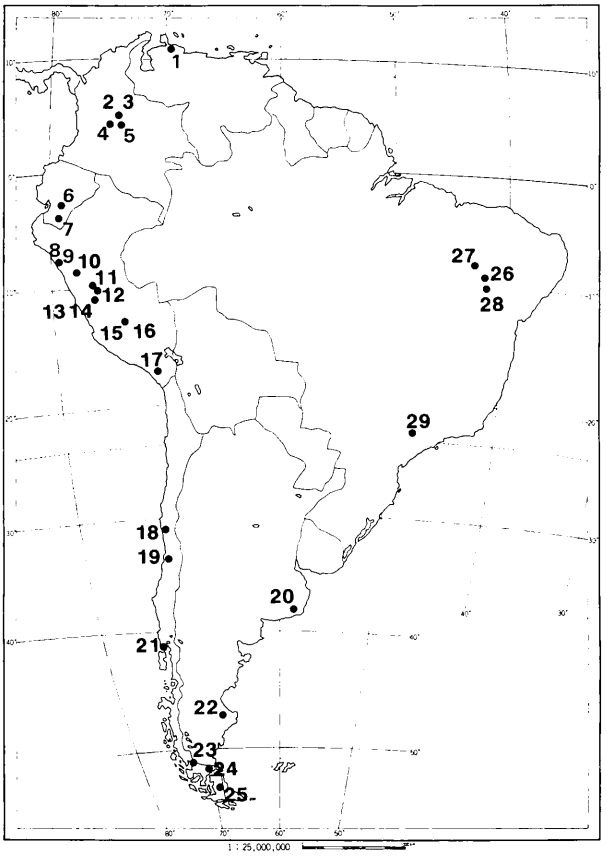

図4　南米におけるパレオ・インディアンのおもな遺跡
1：タイマ・タイマ　2：エル・アブラII　3：ティビト　4：テケンダマ　5：スエバI　6：チョブシ洞窟　7：クビラン　8：ラ・クンブレ　9：キリワク洞窟　10：ギタレーロ洞窟　11：ワクアマチャイ　12：ラウリコチャ　13：テラルマチャイ　14：パチャマチャイ　15：ハイワマチャイ　16：ピキマチャイ　17：トケパラ　18：ケレオ　19：タグア・タグア　20：セロ・ラ・チーナ　21：モンテ・ベルデ　22：ロス・トルドス　23：クエバ・デル・メディオ　24：フェルズ洞窟　25：トレス・アローヨス　26：メイオ洞窟　27：ペドラ・フラーダ・ボケイラン洞窟　28：エスペランサ洞窟　29：アリセ・ボエ

先クローヴィスの問題解明には，視点を変えて南米からの発想も必要かもしれない．最初に南米大陸に足を踏み入れた人々は，北米大陸を縦断してきた人々，あるいはその子孫である．したがって，北米における人類の起源の問題が片づけば，南米の初期人類の問題は容易に決着がつきそうである．ところが，実際には近年，南米各地から報告される初期の人類に関する情報は，次々と古くなるいっぽうで，北米における研究動向とは真っ向から対立している（図4，5）．

南米における確実なパレオ・インディアンの証拠は，やはりクローヴィス同様，明確な尖頭器の形をとる石器，すなわち魚尾形尖頭器であり，これに与えられている年代も1万2000年から1万1000年前頃である．しかし，北米の先クローヴィスにあたる石器文化の存在を唱える研究者もかなりいる．

カナダのアルバータ大学のアラン・ブライアンは，南米のベネズエラ，ブラジル，チリ，アルゼンチンで近年，相次いで古い年代が報じられている遺跡を積極的に取り上げ，新大陸における人類の歴史を2万年以上のスケールでとらえようとしている．

ブライアンがとりあげる遺跡に，ベネズエラのタイマ・タイマがある．この遺跡は南米でも珍しい屠殺址（Kill Site）である．大量のマストドンの骨とこれに共伴する状態でエル・ホボ型とよばれる尖頭器が発見されている（図6）．南米のパレオ・インディアン遺跡で最も充実した年代測定が行われ，1万4000年前から1万1000年前に及ぶ値が得られているが，湧き水による層位の混乱，測定試料への影響が認められるか否かをめぐる論争が続いている．

チリのモンテ・ベルデは，最近発掘が行われ，衝撃的な報告がなされた遺跡である．チリ南部の森林地帯の河岸段丘に位置し，3万年前から1万3000年前までにわたる利用が認められるという．ここでは新大陸ではじめて半定住的な住居跡が発見されている（図7）．馬蹄形に盛り上がった土には柱に使われた木材片が伴い，炉跡も見られるという．石器は，両面加工石器，投石用のボーラ，マストドンの骨の加工品などが出土している．最新の情報によると，さらに多くの住居址や足跡，さらにエル・ホボに似た尖頭器も出土していると聞く．筆者はここを訪れる機会を得たが，周囲は湿地といってもよく，川の流れによって削られた段丘面の観察からは，堆積層がかなり浅く，浸食作用を受けていることが予想された（写真1）．古環境復元の専門家による吟味と分析が必要であ

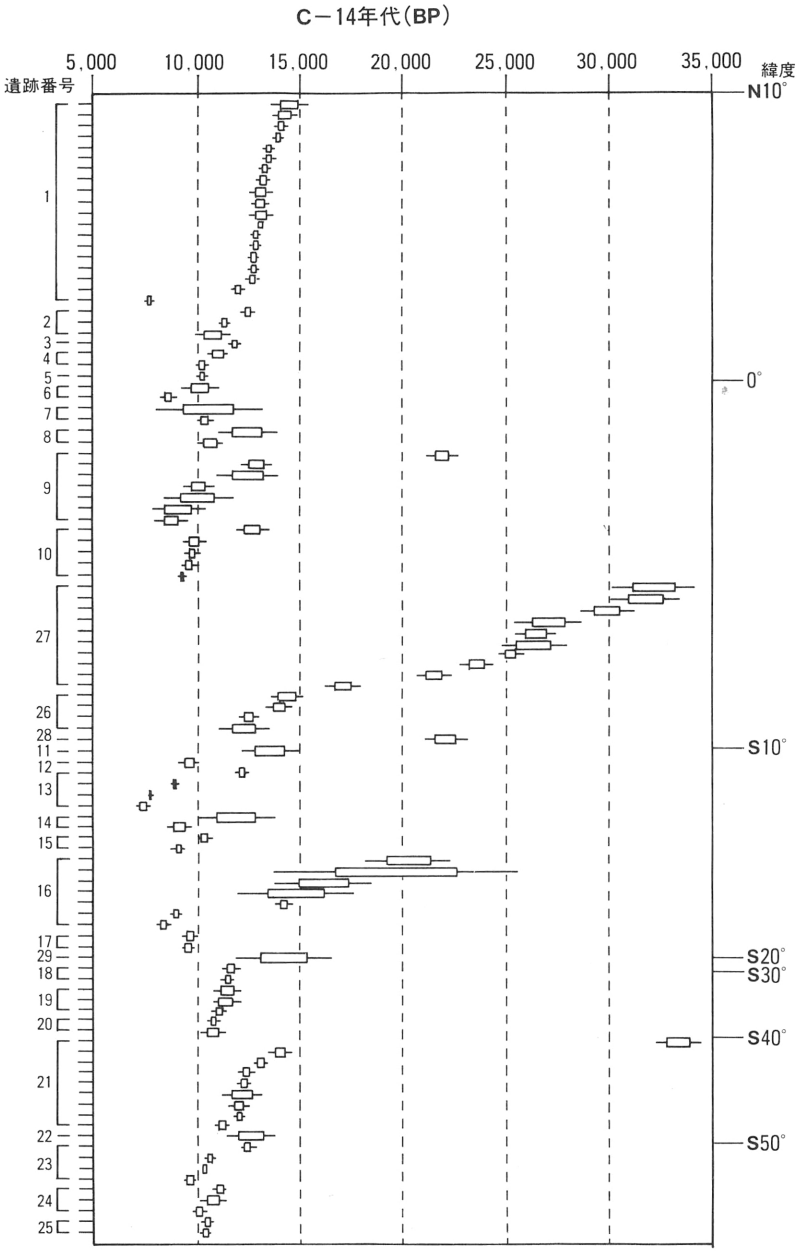

図5　南米初期人類の放射性炭素年代（遺跡番号は図4と同じ）

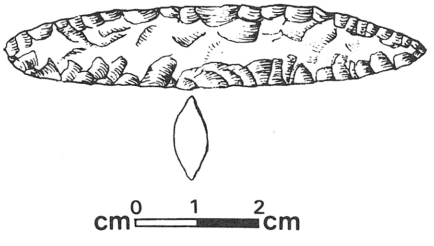

図6　ベネズエラのエル・ホボ型尖頭器（Bryan 1983より）

る．また尖頭器発見のニュースはこの遺跡の信頼性を高める上で積極的に評価したいが，他の石器については，人工物として判別できるものが少なすぎる．

二つだけ紹介してみたが，このほかブラジルなど最近の南米の年代データは，おしなべて1万7000年前から3万年前の間を示している．しかし，これらの遺跡は，層位，年代測定値，遺物が

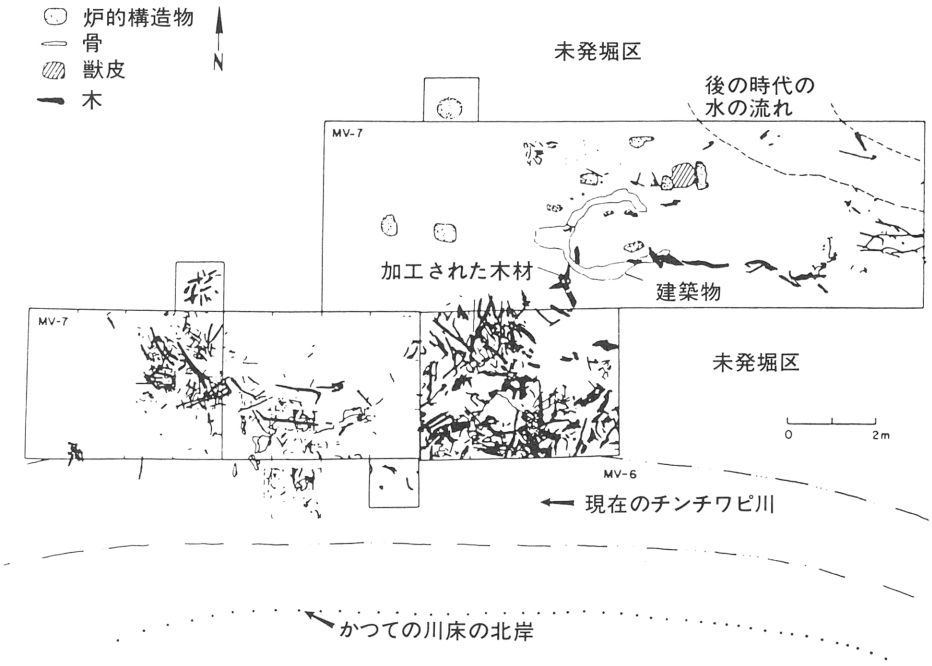

図7　モンテ・ベルデ遺跡の建築物と木，骨，炉などの分布（Dillehay 1989 より）

写真1　チリ南部モンテ・ベルデ遺跡　筆者撮影

人工物かどうかの判定があいまいであり，肯定的な評価を与えることはむずかしい．それになによりも，南米でそれほど古い年代を認めても，南米以上に調査が実施されている北米で古い遺跡が発見されていないのは論理的整合性に欠けるといわざるをえない．今のところ，南米における1万2000年前以前の文化の存在については，研究者間の合意が得られていないのである．これに関連して尖頭器の起源について触れておきたい．

尖頭器の起源

先クローヴィス文化の探求は，もともと見事な作りを見せるクローヴィス型尖頭器がいきなり生まれたわけはなく，どこかに母体となる石器技術があったはずだという考えに端を発している．それはもちろん正しい研究方向ではある．

たとえば，北米でも南米でもクローヴィスに代表されるような尖頭器が登場する前には，片面加工の剝片石器や石核石器が製作されていたと考える研究者がいる．先にもとりあげたアラン・ブライアンは，その代表格である．尖頭器の役割を担った木器や骨器の存在は否定していないが，石器は単純なものしかなかったと考えるのである．ここには，明らかにこうした単純な石器複合を持つ集団がすでに存在していて，そこから見事な石器文化が開花したという論理が見える．根拠はすでに述べてきた先クローヴィスの遺跡で認められる石器複合にある（メドウクロフトなど尖頭器を持ちながら古い年代が出ている遺跡を除く）．

しかし，遺跡データの整合性に問題のある先クローヴィス文化の遺跡を論拠に据えるには注意が必要である．またブライアンが南米で片面加工剝片および石核石器伝統（先クローヴィス）の代表と考えている遺跡の中には，モンテ・ベルデやタグア・タグアのように頭初の発掘では出土しなかった両面加工石器や尖頭器が再調査の際に出土している例も含まれている．小規模発掘による限定した資料を扱うことへの警鐘ともいえる．この点を踏まえた上で，石器，とくに南米の尖頭器の起源について考えてみよう．

すでに述べてきたように，南米各地での人類の活動を示す確実な証拠は魚尾形尖頭器の出現にある（図8）．エクアドルの山岳地帯，ペルーの北海岸，ウルグアイ，コロンビア，ベネズエラなどかなり広い地域からその存在が報告されているが，充実した資料は南米南部のチリやアルゼンチンに限定され，年代は最終氷期末の1万2000から1万1000年前頃を示す．年代的有意差は，今のところわずかであるので，これをもって伝播経路を論じることはできないが，南米西側に走るアンデス山脈沿いに，移住もしくは技術の伝播する回路，ルートが存在していたことがうかがえる．ではこれら尖頭器の起源についてはどのように考えたらよいのであろうか．

南米の石器文化を比較的新しいと考える慎重派は，北米で1万1500年前頃より現われるクローヴィスやその後現われる様々な尖頭器に，南米の尖頭器の原型を求める傾向にある．魚尾形尖頭器に見られる柄を装着するための樋状剝離の技術は独立発生よりも単一の起源を考えるのに適していると言えよう．またブライアンが南米で発明された最古の尖頭器の一つとしてよくとりあげるベネズエラのエル・ホボ型尖頭器も，年代を除けば，北米テキサスのレルマ型尖頭器に類似していることがよく指摘される．このように南米全体の尖頭器の発生を考えたとき，北米を視点から外すことはできない．

一方ブライアンら早期渡来説の立場に立てば，片面加工剝片・石核石器伝統こそ尖頭器が発明される土台を作ったということになろう．これを示唆する状況証拠もいくつかある．たとえば樋状剝離の技術を除けば，特異な形態をとる魚尾形尖頭

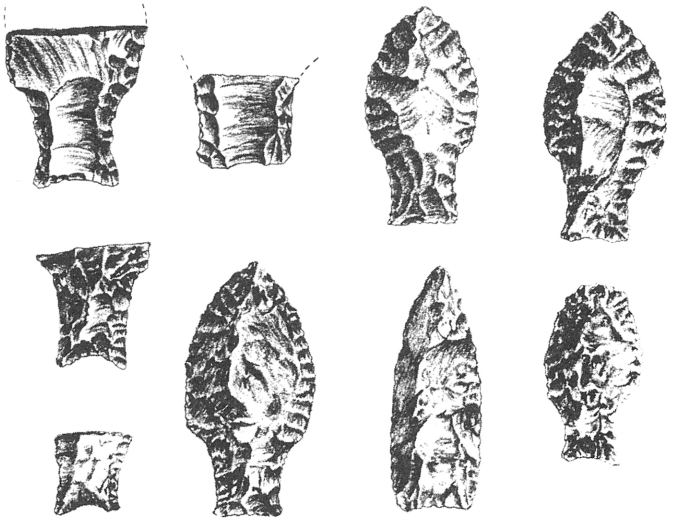

図8　南米南端部フェルズ洞窟出土の尖頭器，下段の1点を除いてすべて魚尾形尖頭器（Lynch 1978より）

器となると，クローヴィスの主な分布域である北米には存在せず，中米や南米だけで使用されたことがうかがえる．この点では北米以外の地での発生を考えるには有利かもしれない．樋状剝離でさえ実験考古学の立場から南北両大陸に見られる技術的相違を唱える研究者もいる．

このように南米において尖頭器の登場をかなり古く考え，また尖頭器に先行する石器文化の存在を認めるかどうかは，尖頭器の起源を北米からの伝播とするのか，南米独自の発明なのか，あるいはそれらの考え方の折衷的なもので解釈すべきなのかといった複雑な問題と絡み合っているのである．慎重派と早期渡来派との論争の中で，いずれ何か解明の光が見えてくるかもしれない．

アメリカ大陸における人類の拡散と大型動物の絶滅

アメリカ大陸における最初の人類の年代は，尖頭器文化が南北両大陸に登場する1万2000年前頃ならば確実であり，それ以前については決着がついていないことをこれまで述べてきた．しかしこうした解釈の相違は年代だけではなく，大型動物の絶滅，人類拡散のモデルや出土する遺物や遺残から推測される生業面まで影響を及ぼしている．

氷期のアメリカ大陸には，さまざまな大型動物が生息していた．マンモス(メキシコ以北)，マストドン，オオナマケモノ，サーベル・タイガー，巨大アルマジロ，ウマなどである．ところがこうした大型動物は，氷期の末から後氷期の初めにかけてのきわめて短い期間に絶滅を遂げてしまう．その原因はいまだによくわかっていない．

アリゾナ大学のポール・マーティンは，人為説を掲げる研究者の一人である．マンモスなどが大量に殺戮された遺跡で尖頭器が発見されるクローヴィス文化の例を引き，大型動物の絶滅の時期と尖頭器の出現の時期の一致に因果関係を見いだす．さらにこうした尖頭器を伴うパレオ・インディアンの遺跡が南北両大陸で千年しか違わずに分布している点に注目して，カナダのエドモントンを出発した狩猟民がひたすら大型動物を狩猟し尽くしながら，急速に南下を遂げるシミュレーション・モデルを発表した．

これに対して後氷期における氷河の後退とそれに伴う環境の変化が原因だという環境変化説で応じる一派もある．氷期の環境は少なくとも北米では季節性が乏しく，地域による動植物の棲み分けが見られなかった．季節性と動植物の棲み分けが顕著となる後氷期の環境は大型動物の生息域を狭め，やがて絶滅をもたらしたというのである．同じような条件下であったアフリカやオーストラリア大陸で絶滅した動物が少ないのは，人類と動物の共生の歴史の長さの違いによって説明できるという．しかしそれ以前の間氷期になぜ絶滅しなかったのかはこのモデルではうまく説明できない．

いずれにしても考古学の分野にも多大な影響を与えた意味で，マーティンの考え方は注目に値する．この説の流布によってクローヴィス人はマンモス・ハンター，パレオ・インディアンは大型動物の狩猟に依存していたという生業像を根づかせる結果となった．しかし本当に肉ばかり食べていたのであろうか．最近の研究では，こうした屠殺址でさえ，大型動物の骨以外にも多数の小動物，植物の出土を報じるものが少なくない．北米のクローヴィスやそれに続くフォルサム文化の遺跡はもちろん，南米南端の洞窟遺跡でも絶滅動物とともに，さまざまな動植物資源の利用を示唆する証拠が見つかっている．多種多様な食料を摂取した複合的な生業を想定する方が真実に近くはなかろうか．

もともとこの複合型生業形態（あるいは一般的採集狩猟）の考え方は，先クローヴィスの存在を認める研究者も主張してきた．メドウクロフト洞窟を発掘しているピッツバーグ大学のジェームズ・アドヴォシオは，先クローヴィスの層に白尾鹿や小動物の骨，堅果類などの植物の遺残を認め，大型動物への依存とは違う生業パターンを抽出している．また南米のデータから人類の登場を古く考えるブライアンも，尖頭器を含まない未発達な石器文化を，大型動物の狩猟に頼るというよりも周辺の環境に適応した複合的な生業の成立を示唆する証拠として据えている．

このように，たとえ先クローヴィス文化の存在が現段階で認められるに至っていないにせよ，そ

れらのデータから推測される生業像は，マーティンのように偏った資源に依存するパレオ・インディアンの姿を矯正する意味では重要な役割を果たしている．

大型動物の絶滅とクローヴィス文化の時間的一致は否定できない．何らかの因果関係が求められるにしても，これをパレオ・インディアンの一般的な生業形態と短絡的に結び付けるべきではない．環境変化説にも耳を傾けなければならないし，現存する複合的な生業を持つ採集狩猟民社会のデータから，パレオ・インディアンが威信獲得など食料以外の別の文化的価値を付与した狩猟を行った可能性すら想定できる．

大型動物の遺骸は確かに遺跡で印象的な存在である．しかしそれに覆い隠されてしまった細部の情報にこそ真実が隠されているのかもしれない．その意味では，たとえ先クローヴィス，あるいはそれに相当する南米の石器文化の存在が現段階で認められるに至っていないにせよ，尖頭器出現以前の人類の証拠をめぐる論争は，副産物としてこれまで流布していた生業像の再吟味を呼び起こし，より正確なパレオ・インディアン像を描くための推進力となっているといえるかもしれない．

参考文献

1) Adovacio, J.M., Boldurian, A.T. and Carlisle, R.C.: Who are those guys?: some biased thoughts on the initial peopling of the New World. In Ronald C.Carlisle (ed.), *Americans before Columbus: Ice-age Origins*. Department of Anthropology, University of Pittsburgh, pp. 75-82 (1988).
2) Agenbroad, Larry D.: New World Mammoth distribution. In Paul S. Martin and Richard G. Klein (eds.), *Quaternary Extinctions: a Prehistoric Revolution*. The University of Arizona Press, pp. 90-108 (1984).
3) Bryan, Alan L.: South America. In Richard Shutler, Jr. (ed.), *Early man in the New World*. Sage Publications, pp. 137-157 (1983).
4) Dillehay, Tom D.: *Monte Verde: a Late Pleistocene Settlement in Chile, Vol I*. Smithsonian Institution Press (1989).
5) ブライアン・フェイガン著，河合信和訳：アメリカの起源—人類の遙かな旅路，どうぶつ社，東京 (1990).
6) Gruhn, Ruth and Bryan, Alan L.: The record of Pleistocene megafaunal extinctions at Taima-taima, northern Venezuela. In Paul S. Martin and Richard G. Klein (eds.), *Quaternary Extinctions: a Prehistoric Revolution*. The University of Arizona Press, pp. 128-137 (1984).
7) Guthrie, R.Dale: Mosaics, allelochemics, and nutrients: an ecological theory of late Pleistocene megafaunal extinctions. In Paul S. Martin and Richard G.Klen (eds.), *Quaternary Extinctions: a Prehistoric Revolution*. The University of Arizona Press, pp. 259-298 (1984).
8) Lynch, Thomas F.: The Paleo-Indians. In Jesse D. Jennings (ed.), *Ancient South Americans*. W.H. Freeman and Company, pp. 87-137 (1978).
9) Martin, Paul S.: The discovery of America. *Science*, **179**: 969-974 (1973).
10) 小野有五：氷期のアメリカ大陸(野上道男と共著)，赤沢　威，坂口　豊，冨田幸光，山本紀夫編　アメリカ大陸の自然誌　第2巻「最初のアメリカ人」，岩波書店，2-55頁 (1992).

関　雄二（せき・ゆうじ，1956年生）
東京大学総合研究資料館 助手．東京大学大学院修了．社会学修士．
研究課題：文化人類学／新大陸文明の形成過程／遺跡をめぐる歴史観の様態．

国際通貨発行特権の史的研究　　＜文部省助成図書＞

有馬 敏則著　A5判　340ページ　5,974円

本書は，なお未開拓の分野である国際通貨発行特権に関する学説を明確にするため，ブレトンウッズ体制におけるアメリカの国際通貨発行特権による利益とそれから派生する利益の大きさを明らかにし，特定国のみが国際通貨発行に伴う利益を独占することのない「対称的通貨制度」構築に向けて総合的な考察を加えたものである．

発行 **日本学術振興会**　最寄りの書店にない場合は，書店に取次㈱丸善出版事業部と申し添え御注文ください．